

# 被災者の多様性と社会保障 日常の再建に向けて

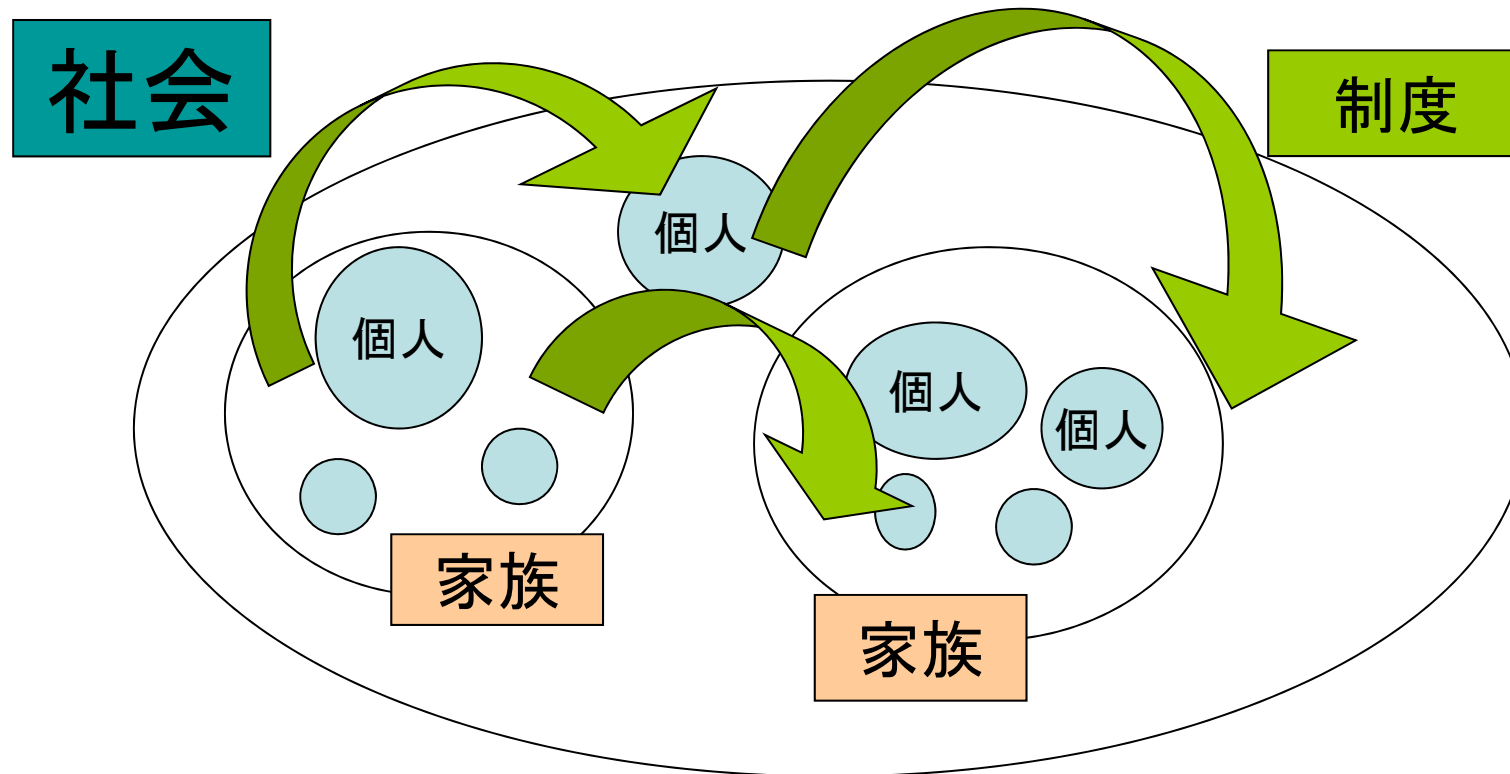
東日本大震災復興構想会議検討部会

2011年4月29日

白波瀬佐和子

# 個人と社会

- 被災者は社会を構成する個人
- 社会と個人をつなぐ制度（社会保障制度）



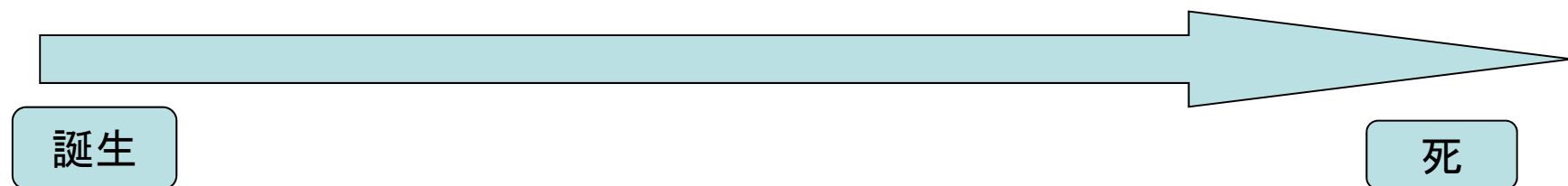
# 被災者の中身は多様

- 被災者とは、乳幼児、児童、若者、壮年者、そして高齢者など、異なるライフステージに位置する者が混在する。
- さらに、ジェンダー、障害の有無、国籍といったもう一つの軸が絡む。同じ児童といっても、身体的障害を持つ子、心の病を持つ子がおり、同じ高齢者といえども男性と女性がいる。さらに、日本語を母語としない被災者もいる。

# [切れ目なき社会保障]

## ライフステージの違いとニーズの違い

- 人の一生は異なるステージが積み重なったもの



ステージ別：母子保健 児童福祉 教育 雇用 介護

一生を通じて：医療 所得保障

人の一生と社会保障制度の密接なかかわり

# 復興に社会保障が深く係わる

- 復興か社会保障か、という二項対立的に問題を設定すべきでない。
- 例えば、医療は復興を考える場合、最初に解決すべき課題の一つであり、医療へのアクセスを被災者すべてに保障することが優先課題となる。
  - 医師と看護師の確保
  - 医療施設の再生（仮設診療所の建設）

# 復興を医療から考えると

- 地域の医療拠点の確立
- 保健師、ソーシャルワーカーによる巡回サービス：高齢者、乳幼児
- 公衆衛生の再生、充実：感染症、心の相談
- 食の安全、栄養指導
- 医薬品の調達

異なる専門家の連携が要

# 地域コミュニティを支える専門職

- 生活の場(生活圏)に、医療・介護・福祉の包括的拠点を作る.
- その中心的役割を担うのが、保健師でありソーシャルワーカー、そしてカウンセラーである.

専門職の派遣と養成

専門職を束ねるコーディネーターの養成

# 復興を福祉のあり方から考える

- 要介護者への対応
  - － 介護ケアの担い手問題
  - － 介護保険手続き上の問題(迅速な対応)
- 障害者への対応
  - － 障害者本人のみならず障害者を抱える家族への支援、ケア
- 日本語を母語としない住民への対応
  - － 多様な背景をもつものが共に生きる社会に向けた第一歩
- 貧困層への対応
  - － 現時点ではこの問題について、まだ顕在化していないが、今後、雇用の問題も含めて深刻化することは疑いない。
  - － 福祉事務所が住民の福祉に十分機能するよう、生活保護に留まらない住民へのトータルな福祉サービス拠点のあり方を設計すべき。



# 仮設住宅の建設と生活圏の構築

## 住む場所と生活する場所

- 住む人の立場にたった、生活圏の構築。
  - － 医療サービスへのアクセス
  - － 介護サービスの提供
  - － 子育て支援（保育サービス、育児相談等）
  - － 公園、公民館、児童館、図書館等
  - － 雇用支援サービス（職業訓練）
- 仮設住宅を生活圏とするために、社会保障の整備は不可欠

# 少子高齢社会の新たなコミュニティモデル

## 中範囲生活圏の創造

### 互いの顔が見える循環型コミュニティ空間の形成

女性、若者、外国人、障害者など、多様な人々に意思決定の場への参加要請

### 参加型社会の形成

新しいスキル(熟練)を獲得するための積極的な職業訓練機会の提供  
男女共同参画社会と生涯現役社会の実現

### 医療・介護・福祉サービスの包括的拠点の形成

拠点からアクセスが容易な範囲に生活圏を設定する。ソーシャルワーカーによる訪問といった、見守り巡回も不可欠

### 各種情報の収集と情報共有システムの確立

# 現状把握のための実態調査実施

- 多様であることに、格差が潜む。
- 声なき声、見えにくいニーズをすくいあげ、復興に向けた手立てを考える上に、被災地全土にわたる、継続的な実態調査が必要である。

少数派に敏感であれ

# 少数派の声に耳を傾ける

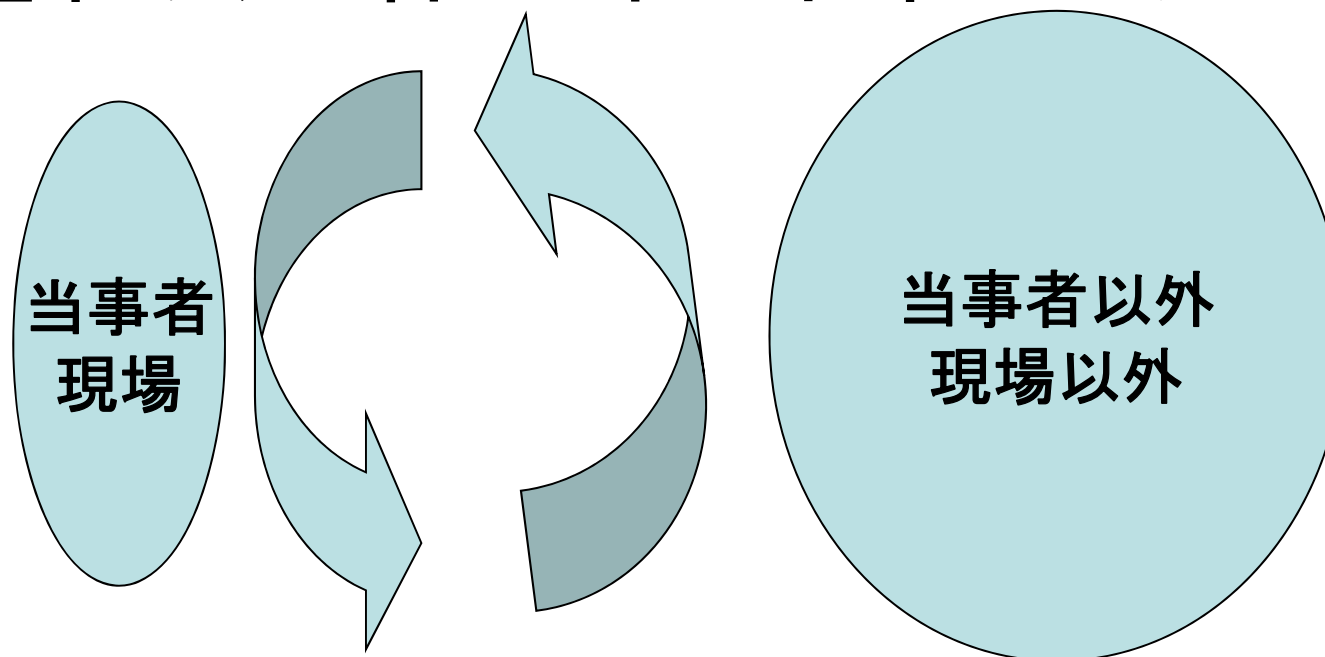
- 集団にあって、少数派の声は聞こえにくい。少数派の声をあえて聞こうとする姿勢が、きめ細かな震災対応に結びついていく。
- 一見してわかりにくい、心身の問題を抱えるものへの配慮が必要である。
- 全体の決定は必ずしも全員の決定ではない。少数派の声に耳を傾けることで、新たな視点が生まれ、集団組織の自浄効果が期待できる。

# 中長期的視野にたった復興への道筋

- 助け合い(中規模生活圏)の仕組みを制度として確立
- 住民(現場)を優先した生活圏の確立と自治体間の格差を見据えた国による対応

双方向の徹底した情報開示・交換  
意思決定の道筋の明確化

# 復興を社会全体の中で位置づけていく



現場の声に耳を傾け、現場に寄り添う復興への道  
当事者と当事者以外を「同士」としてつなぐ工夫  
復興をバネにする福祉コミュニティモデルの提示

大震災から復興までの道を歴史として刻む